



經驗略疫門口義

武  
541



冊  
卷  
541

古醫方經驗略口義 疫門



東京 宮西諸助

門 尾張 加藤正道

權田先生講說 上毛 齋藤助

甲斐 八代駒雄

東京 井上頼因 校訂

依夜民 又登岐 乃介

和名鈔に。疫夜夜美。一云登岐乃介也。何で。さて。依夜民ハ  
熱瀉をえ病の義をえハ書紀に。瘵瘠毒等をくえり。六ハ門人  
萩原直胤が考なり。登岐乃介ハ時行也ハむが如し。



依夜民

漢名溫疫  
又傷寒

之為病。惡寒發熱。頭痛項強。肢節煩疼。身

熱脈浮數。舌上有胎也。

依夜民之為病。えやみの病也。あり此義。小て。疫の病がら

也。ハむが如し。論語小。同之。為人也。あり之。為此字をたを

ふ。ぼし。○漢名傷寒。又溫疫。肘後方小。貴勝雅言。總呼傷寒。

世俗因號為時行也。見え千金方に。傷寒雅士之辭。云。天行溫

疫。是田舎間。號耳也。あてて。傷寒溫疫時行。天行共小。一病の

名。小て。こく。乃依夜民。小。あり。あり。ぎる。哉。溫疫論。原病篇

に。傷寒。與中暑感。天地之常氣。疫者感。天地之厲氣。まふ。辨明

傷寒時疫篇小。傷寒不傳染於人。時疫能傳染於人。傷寒之邪。

自毫毛而入。時疫之邪。自口鼻而入。ふ。種々に論じて。傷寒。

溫疫を二病とせ。は。新奇を好むる。謬小て。言小足。然と

也。も同書中其證治。哉。論。交る。に至りて。ハ。閒採。ぼさ。も。此。あ

り。下小を。て。く。引出て。辨を。し。○惡寒發熱。惡寒と神遺

方に。ハ。ふ。於曾介。小て。俗小云。甘ムケ。なり。同書。布差岐和邪

依の篇小。介阿奈乎。布差岐。豆波。太於曾介。と。あり。發熱と神

遺方に。ハ。ふ。奴久民。れり。布差岐和邪。依の篇小。和邪阿之母

乃保。乃介乎。布差岐。豆加。古牟流波。奴久民。と。あり。こ。せ。乃。俚

和多良依の篇小。須惠。尔登。豆流母。乃。と。あり。小。當りて。病皮

膚小。ある。證。小て。傷寒論小云。太陽病。あ。て。又此部位。小して。

無熱惡寒する者ハ少陰病なり。さて此證如何ハ此バ惡寒發熱すゆぞ云に。も些人身の氣ト經驗鈔小も法ばらに辨牙ある如ク。火の性ナガある魂タマより發タテる氣にて。即ち火氣ある故もて其氣行周キタ處ハ皆溫暖あり。又ハ乃阿奈耳加アノナニ與布和加智ユフワカチの篇小。介阿奈波保ケアナハホ乃寸惠乎スエフイダレ以多之イダレ也。何り。又素問。生氣通天論小。陽氣已虛氣門乃閉也。何る注小。氣門謂イハレ玄府也。所以發泄スル經脈營衛之氣故謂之氣門也。見え。鑿イハレ範提綱小。毛竅發泄蒸氣也。あゆ如ク。常小毛孔を已發泄モレイるも此あり。然るにまじ熱をなほと邪毛孔を塞ぎ皮膚收閉る小よして。火の性ナガある氣の發泄モレイるこ能ハ皮内小屈曲り

て鬱ウツるの故小。素問。玉機真藏論小。風寒客於人使人毫毛畢直皮膚閉而為熱也。ハ。又溫疫論小。正氣被傷邪氣始得張溢營衛運行之機乃為之阻。吾身之陽氣因而屈曲故為熱也。ある意は牙小同じ。さて發熱はるも其屈カクみある正氣の勢を張て。邪氣收逐ハむとて。皮膚小進む故なり。惡寒ハ邪氣の爲小。正氣推さきて退く故小。猶物小驚き恐るる時小。身の毛を法バ加カてゾ、也寒くある也同意也。さてハ於曾介也云も。恐氣オウキの義あるこ也。經驗鈔小辨牙たるの如し。さて惡寒發熱日小何度もはるハ。邪氣也正氣也皮膚小相爭ふ故小。邪氣侵入をむとするに。正氣推さきて

退く則ハ惡寒し。そを入じ也。正氣勢子張て。進む則と發熱す。依なり。さる哉上小引る溫疫論小。疫者感天地之厲氣也。何る文此續小。邪自口鼻而入則其所客。內不在藏府外不在經絡。舍於夾脊之內。去表不遠。附近於胃。乃表裡之分界。是爲半表半裡。卽鍼經所謂橫連膜原是也。亦云。溫疫の邪ハ。始々り半表半裏不在也。強て傷寒と溫疫を別たむ。とす。依謬なり。○頭痛項強。頭痛ハ。神遺方小。加宇倍字智かり。さて其字智と。卽て痛小。其痛と。同書。布差岐和邪依の篇小。保乃介斗智之保乎。加吳免豆以多民宇豆支也。ある如く。邪毒氣血哉屈むる證なり。項と。說文ハ。頭後也。

坐何り。和名鈔小。項。和名字奈自也。ありて。俗小云エリクビあり。強と強直の強にて。新撰字鏡小。強。古波志と何りて。卽俗小云コハルれ也。神遺方紀門加多豆小。世奈宇奈自余都支古婆美也。ある是あり。此證ハ。乃俚和多良依の篇。蒙登の條也。加吳末流蒙乃也。差加迺流母乃也。小當りて。氣血分肉小屈まて上衝も此なり。○肢節煩疼。肢ハ。四肢の肢節ハ。骨節の節あり。煩ハ。傷寒論集成小。煩渴の語を解きて。煩渴謂渴之甚也。煩字有主用。有兼用。如煩心煩胸煩內煩微煩皆主煩言之。若夫煩躁煩渴煩疼煩熱煩驚煩滿皆不以煩爲主。蓋所兼及之客證。已判爲二證非也。故煩字在句首者皆帶說

之詞而輕。其在句尾者皆主用之證而重也。あるによりて甚  
き義也。以。疼ハ説文小。動痛也也。何ぞ。神遺方上小引る文  
小。以多美宇豆支也。ある宇豆岐小當せり。されバ手足骨節  
の甚志く疼小。こ也亦氣血分肉に屈する者あり。○身熱  
傷寒論。瘧濕暍篇に。汗出惡寒。身熱而渴。また太陽中篇小。  
身熱不去。身熱惡風也。ある身熱也。同く。總身熱はるあり。  
○脈浮數。脈ハ韻會小。脈幕也。幕絡一體也。何り和名鈔  
小。脈和名知乃美知也。あり。浮ハ予が曾て集録を依脈傳に。  
皮位之脈有餘而骨位之脈不足也。此爲氣血進也。ある數  
と。同書小。速於一息五動也。此爲血亂也。何り。去也邪氣の

爲小塞かきて氣血擾動し。其邪氣を去むと志て皮位小進  
む候あり。傷寒論小。脈浮緊也。何るを思はし。溫疫論。溫疫初  
起篇小。其脈不浮不沉而數也。何るを。邪著膜原也。以ふ新  
説に合せむと。以る妄言を謂はし。○舌上有胎也。胎ハ張  
錫駒が傷寒直解小。苔字に作せり。故按小胎ハ孕胎の胎小  
非也。苔の義あり。こも熱の爲小津液熬煎せらきて。舌上小  
粘著せ依さは。木石おどに苔の生交る如くな依り因せり  
也。見也。神遺方小。之多美曾也。ある即是あり。かくてこれま  
での脈證。疫の候也。するな。て  
而寒熱疼痛甚。脈堅強而無汗者。此爲劇證也。

而 字書小受上起下之辞也。俚語のソレテあり。○寒熱疼痛甚。上の證乃劇甚なるなり。○脈堅強 脈傳小。堅者如按竹針也。此爲氣血結實也。まゝ強者如按琴弦也。此爲氣血強盛也。冬の時。氣血實して強盛なる候也。こゝ上乃浮數の脈小。志て。此脈伐兼るあり。○而無汗者 皮膚字閉塞ぐこせ甚き故也。○此爲劇證 乃俚和多良依の篇各條の末。小波解之支毛乃波云くせある小當りて。總て病證乃劇きも此を以ふ。

寒熱疼痛不甚脈軟弱而有汗者。此爲緩證也。

寒熱疼痛不甚。上の證乃甚からざるなり。○脈軟弱者

脈傳小。軟者如按綿絮也。此爲氣血弛寬也。まゝ弱者如按單布也。此爲氣血衰弱也。此は。是氣血弛みて弱き候なり。こも亦浮數の脈小。志て。此脈を兼ること言も更也。○而有汗者 皮膚を閉塞ぐ甚しからざる故也。○此爲緩證也。乃俚和多良依の篇。各條の末に。由流岐毛乃波云くせある小當りて。總て病證は緩きを以ふ。

劇證脈浮數而堅強者。此爲正邪俱強盛也。

劇證脈浮數而堅強者 上の寒熱疼痛甚者小志て。こは脈ゆるなる也。○此爲正邪俱強盛也 正邪ハ。正氣と邪氣とを言ふ。然志て正氣と身體を周行養ふ氣を言ふ。語を傷寒論





流母乃安里加吳万流毛乃安俚。此有小當るものなるを。そ  
きに就て標本字考定むれば。皮膚に閉依の本證小く。分肉  
小屈まじ上衝と標證と知らぬ。なり。されば其本に就て  
須惠亦登豆流母乃波能暮世。由流免とある小従ひて。發  
表にるを法とハ謂はき。是此治法のと依所に去て。古醫道  
の準則あり。凡吾門病小臨みて。如此鑿案去て治法字求免  
バ。大なる過失ある依はきなり。溫疫論。溫疫初起篇小。晝夜  
發熱。日晡益甚。頭疼身痛。其時邪在夾脊之前腸胃之後。雖有  
頭疼身痛。此邪熱浮越於經。不可認爲傷寒表證。輒用桂枝麻  
黃之類。強發其汗。此邪不在經。汗之徒傷表氣。熱亦不減。又不

可下。此邪不在裡。下之徒傷胃氣。其渴愈甚。宜達原飲也。ある  
と。彼膜原小容る也。云ふ新説を構ふし故の非説小く。信ず  
るに足らぬ。そハ夾脊之前腸胃之後ある膜原に在也。云こ  
ををハ。如何ある診法ありて去き字知也。多々妄説のみな  
きは拘る法あり。因小云。此溫疫論ハ。傷寒也。溫疫也。を二  
病とあした依故小。の、る謬ハ往くあき也。又其中小ハ言  
得るること。論得るることありて。實事小裨益ある事は多  
少のら。擬去ていは。發表小疎に去て攻裏小精し。と謂  
はし。○和氣藥主之。和氣藥ハ。もど加坐耶万比門の方。今  
活の去てこ、小用ふる也。主之ハ。方有執曰く。主主當也。言

以是爲主而損益則有乎人々あり。此方を主當として專一  
小用るなり。因ふに。此方も坐耶万比門の方ふれバ、  
そを活用をむくでハ。依夜美門の乃甫之久須里のかた。正  
當あるはく思ハるべき也。そと蜀椒を主藥と爲ふは、氣味  
辛烈小志て服し難く。はゞ分量を減じ至小に志ては  
効あり。故小和氣藥を用るなり。左小右に發散と桂枝の和  
緩ある小加もみなり也。

和氣藥 大同方

方名所出せもに。既小加坐耶万比門の方下小注すば。今  
更小注ハ。又證候の文及び其解をも略き。以下他門の

藥方を活し用るもみハ。皆去きに倣ひて。

久須加豆良 大之 於味奈加豆良 中之 保曾久味 中

波自加民 中之 多万加波 大

久須加豆良ハ葛根。於味奈加豆良ハ芎藭。保曾久味ハ半夏。  
波自加民ハ生薑。多万加波ハ桂枝なり。大之中。中之小。中  
之大。おどの分量ハ。家塾常用の七。大。大之中。中之小。小。  
之小の六。あり。即其分量あり。方義ハ桂枝氣味辛く甘く  
香く。去て。氣血を外を揚げて。閉塞を開き。急を緩免。汗を發  
し邪を去る。生薑芎藭の氣味辛く香き。桂枝の開發力  
を助け。半夏味發く散に能ありて。亦桂枝の開く力を助る。

葛根味淡く。順行す能あてて。上の四味を合せ。津液を行らし。汗を發しやいふらむるなり。一方の主能ハ氣血を外を揚げ。閉塞を開き。急を緩免。汗を發し邪去あり。こき須惠介登豆流母乃波。能保世互由流免也。古規小加外ふち急よくふけり。此方漢方の桂枝湯。桂枝加葛根湯。葛根湯の三方み能を兼ふり。

蓋用此湯發汗輕者三四日。重者五六日。或七八日以外邪去表熱解爲度。

蓋用此湯發汗。蓋ハ孝經小。蓋天子之孝也。注小蓋猶略也。少ありて。梗槩の義。此湯ハ和氣藥をけい。○輕者三四日。重

者五六日。或七八日。發汗を行ふ小日數に拘ることなく。專病の輕重小從ふ。世醫の三日を期するも乃大。小此也。○以外邪去表熱解爲度。外邪去ハ。外表小在邪氣さるあり。けて外邪去や否ハ。何をも察知す法ぞ也。云小。まは病の輕重に従ひて數日汗を發する小。れ本病勢一日一日。小進み行は法が。今ハ進み止めて。二三日依然と志て何る。こき邪去候あり表熱解と肌表の熱漸小解す法なり。度ハ。適度の度小。發汗を止る適度と爲れ也。

若能發汗徹則病皮膚而罷發汗不徹則邪不去。不去則傳入分肉。分肉而不。漸傳入藏府。入藏府者甚重矣。動至令

人不起也。

若能發汗徹則病皮膚而罷。若ハ儀礼の疏小。不定之辭也。有り。徹ハ透徹なり。則ハ字彙小。若然之辭也。註去。俚語のトキハなり。罷ハ同書小。己也。了也。也。あり。や。み。を。ハ。る。義。あり。さ。ま。バ。發。汗。く。病。小。透。徹。す。る。とき。ハ。邪。分。肉。小。侵。入。せ。ば。皮。膚。に。去。て。己。て。愈。る。を。い。ふ。なり。○發汗不徹則邪不  
去不。去。則。傳。入。分。肉。乃。俚。和。多。良。依。の。篇。に。蒙。登。介。師。豆。免。流。母。乃。也。何。る。こと。あり。傷。寒。論。少。陽。篇。小。本。太。陽。不。解。轉。入。少。陽。者。也。あ。る。も。こ。こ。此。義。あり。○分。肉。而。不。去。漸。傳。入。藏。府。入。藏。府。者。甚。重。矣。乃。俚。和。多。良。依。の。篇。小。奈。加。介。阿。都。万。流。

母乃也何る小當るを乃にて。漢小以ふ陰證なり。傷寒論。陽明篇小。本太陽初得病時發其汗。汗先出不徹。因轉屬陽明。也。あれ。也。然。小。何。ら。也。漸。次。を。も。て。傳。入。す。る。も。此。ハ。必。少。陰。病。也。なり。て。陽。明。病。也。ハ。な。ら。ざ。る。なり。其。と。し。後。小。委。く。辨。は。し。○動。至。令。人。不。起。也。起。て。去。て。斃。ま。さ。む。る。に。至。を。云。ふ。也。

若病重或發汗不徹邪入分肉寒熱往來心下痞滿舌上黃胎渴欲飲水或日晡潮熱或嘔而不能食者雖十日以去更作前方加於宇若乃甫之藥加於宇與之可以鼓動氣血發汗也。

若病重。或發汗不徹。邪入分肉。若病重き。或發汗不徹。の  
ふりて。病不解。去て傳分肉小入を以ふ。○寒熱往來。  
惟忠曰く。寒止即熱。熱止復寒。互而發也。以牙り。こき傷寒  
論。太陽中篇小。正邪分爭。寒熱往來也。ある如く。邪氣正氣  
之分肉の閒。小分爭する也。○心下痞滿。痞ハ。同書同篇  
に。脈浮緊。而復下之。緊反入裏。則作痞。按之自濡。但氣痞耳。也  
あり。神遺方に。六きを牟祿布差賀里也。以ふ。滿ハ。同書小。布  
久里也。以牙也。これ裏氣也。水血也。常伐失ひ。上衝去て。心下  
に聚る也。り。○舌上黃胎。神遺方。保乃之支久寸里の下小。  
支介美曾豆紀也。ある六きあり。こ上小も。以牙る也。如く。

裏氣熱し。津液燥き。舌上小粘著して。胎をふせるが。漸く小  
焦きて。色ばくれ也。○渴欲飲水。同書。保乃之支久寸里。保  
乃加依久寸里等の下小。乃牟度加和支也。あるこれあり。出  
と裏氣熱し。上衝去て。津液を燥す故あり。抑心下痞滿と  
こに至て。みお乃俚和多良依の篇。奈加の條。差加乃  
保流母乃尔當也。り。○或日晡潮熱。日晡ハ。韻會小。日加申  
時也。見申。惟忠曰く。不但於日晡。或於午未申之間。亦可以名  
を以牙り。潮熱ハ。惟忠又曰く。熱之發也。必有時矣。猶潮汐之  
來去。以時所以名曰潮也。以牙ゆも。猶淺きをもて。氣の皮  
寒熱往來と。邪分肉小入也。以牙も。猶淺きをもて。氣の皮

膚小進みて邪を發散せむ也。此一日數發あり。潮熱  
と。一等深き故もて氣暢び難し。故進みて邪を發散せむ也  
此の也。漸く一日に一發なり。故熱を發するハ。氣血進  
みて邪を逐む也。する候ふとバ。猥小其熱を攻矛のら。去  
と後小委曲小辨牙む也。此をを俟たし。○或嘔而不能會者。  
こも亦裏氣の上逆する也。上の心下痞滿小比ぶま。一  
等重きれ也。○雖十日以去。以去ハ。傷寒論太陽中篇麻黃  
湯の條の語。千金翼小己去小作る。十日己去小く。猶以上  
也。ハむむ如し。○更作前方加於字。更ハ。字彙小再也也。  
也。前方ハ。和氣藥をさすれり。作ハ。作劑にるあり。加於字。

と附子を加ふ也。○若乃甫之藥加於字。乃甫之藥ハ。發  
汗劑也。此後小ハ。ふたし。○與之可以鼓動氣血發汗。  
附子に鼓動の能あること後小言はし。

方此之時。大汗出而解。或振寒如瘧。發熱汗出而去。

方此之時。上の發散の藥を用ひし後を指す。○大汗  
出而解。藥力が爲小鼓動せらむ。氣血奮起して邪と争む。  
大熱を發する小至りて。氣漸く邪小勝ち。大汗を發して邪  
を逐ひ。故病解散にるあり。○或振寒如瘧。惡寒甚く振  
慄するに至る。これ氣血大小奮起せむ也。欲は候あり。○  
發熱汗出而去。氣血邪に勝ち大小進みて邪を逐ひ。邪汗

小從レて去るナリ。こキ傷寒論。太陽中篇小。凡柴胡湯證而  
下之。若柴胡證不罷者。復與柴胡湯。必蒸蒸而振。却發熱汗出。  
而解也。何ル小。勢同くテ去て其意大小異ナ。亦モのれり。そハ  
彼と清解を主シ。是ハ發汗を主シ。然レ去てク其機會  
小中ニ也。如ハ其應響の如きも乃リ何リ。傷寒論。辨脈法篇に  
病有戰而汗出。因得解者也。亦モ是ナリ。又溫疫論小。こキ  
を戰汗也云。そレ其原病篇小。邪在半表半裏。表雖有汗。徒損真  
氣。邪氣深伏。何得解。必俟其伏邪漸潰。表氣潛行於內。乃作大  
戰。精氣自內由膜原以達表。振戰止而後熱。此時表裡相通。故  
大汗淋漓。衣被濕透。邪從汗解。此名戰汗也。何ルと然ルこと

れり。但膜原の説ト信ト不足ニ。さテ此所小治術の主意を辨  
ずてむ。そハ世醫の治術を見るに。發病ト五六日ヲ越シて。  
寒熱往來。默默不欲飲食。小至シバ。半表半裏少陽病ナリ也。  
謂て發汗を止メて。小柴胡湯を用フ。潮熱ヲ發スるニ至レれ  
バ。有潮熱者。此外欲解。可攻裏也。何レ也。以テ少シに腹滿ア  
キバ。大柴胡湯。若ハ柴胡加芒硝湯。或ハ陽明病ト去て承氣  
湯を與フ。去れ一向小仲景の方ヲみ信用ス去て。熱ト如何ナ  
るモ乃ド也。言フこキ越シ詳シ小せげ亦モ其ノ小て。以テまだ治術の  
本旨ヲ得ル也。然レハ言難シるハ。去レ既ニ小も言フ如ク熱  
ハ氣の屈マりト起ルもの小て。發熱潮熱ハ。氣の峻發ス也。



て邪伐逐小を治すも乃なきバ。仍此時に至りても。その峻發  
せむせむの勢を助けて。發汗去て邪を去伐要せざるは亦  
也。若發汗を去て。小柴胡湯をもて清解せむせむも。其  
邪ある多如何をむ。又大柴胡。柴胡加芒硝。承氣等をもて。大  
便を下はせむ。其邪のまゝ裏小入らざれば如何をむ。心下  
痞嘔而不能食等の裏證ハ何れも。こも亦邪分肉小在に  
て。其惱み藏府の裏小及するも。乃小。乃俚乃毛登須  
惠の篇小。蒙登介安里豆奈加介於與毘也。ある小當りて。邪  
分肉小在て。其惱みの藏府小及するも。乃小治をや。こら乃  
俚和多良依の篇小。蒙登介師豆免流母乃波。能保世豆免求

良之也。何るに従ひて。邪分肉小侵入はせむ。仍發汗去て邪  
を逐ふこそ。治術の本旨とハ謂ふべし。溫疫論。似裏非裏篇  
小。時疫初起便作潮熱。熱甚亦謔語。誤認爲裏證。妄用承氣。是  
爲誅伐無辜。不知伏邪附近於胃。邪未入府亦能潮熱。午後熱  
甚亦謔語。不待胃實而後能也。とあるを思はし

後仍有微熱者。與和氣本出雲藥。可以鎮氣血則愈。

後仍有微熱者。後ハ。上の方法小従ひて汗を發し解去て  
後あり。仍ハ。韻會小。就也重也とありて。俚語ハヤハリなり。  
有微熱者ハ。氣血の擾亂未復を言はれ。○與和氣本出  
雲藥。可以鎮氣血則愈。和氣本と云。和氣義啓が印行せる

神遺方を以ふ。鎮氣血と擾亂せし氣血を去るを以ふ  
あり。

乃甫之久壽俚 神遺方

出雲國造所傳乃方元 武内宿

祿乃久寸俚 奈里

乃甫之也。内より外牙發するを以ふ神遺方の例を以て  
即發汗せしむが如し。此は一方の主能をもて名付  
あり。所傳の解ハ治療小關らざれば略き也。以下これ小  
倣牙。

衣夜民波。波之免加宇倍宇智。於曾介乎乃支布流比之。乃  
致大 余 奴久美 之。阿世奈紀毛乃 余 阿多布倍之。

こと温疫。初起頭痛。惡寒戰慄。後大小發熱。去て汗なき者小  
與治き方ぞ也。以牙法にて。邪皮膚を閉ぢ。其惱み分肉に及  
も此を治する方なり。

都知多良 大之

万久壽祿 大之

波自加民 中之

奈流波自加民 小

都智多良 ハ 獨活 ハ 波自加民 ハ 生薑 ハ 奈流波自加民 ハ 蜀椒 ハ  
り。万久壽祿 ハ 前小出也。方義 ハ 蜀椒 ハ 大 ハ 辛 ハ 芳烈 ハ 小 ハ  
マ。氣血を升を揚げて。閉塞を開き汗を發し邪を去る。生薑  
辛く香く。蜀椒の開き發は力多助け。獨活葛根淡くして津  
液を順らし。上の二味を力合せ。汗を發し易らむ。

一方其主能ハ皮膚の閉塞を開き汗を發し邪を去る。加  
於<sup>オウ</sup>宇ハ附子辛く毒有り。辛杞ハ本方の開く力に助け毒を  
とく氣血を鼓動する能あることハ藥能解小詳小すま  
ども今亦其大略をいはむに。凡附子を試用する小其法二  
途小分たす。一と毒をもて毒を逐ふ。依<sup>エ</sup>太<sup>ダ</sup>須<sup>ス</sup>久<sup>ク</sup>里<sup>リ</sup>乃<sup>ノ</sup>藥。大  
衰那藥の類也。多量小用いて其瞑眩を恐とす。一ハ毒を  
もて氣血を鼓動して邪を逐ひ内陷を發し。赤間藥。中道川  
瀬藥。男崎藥。加和之藥の類也。亦其量少に。緩和小  
して効あらむことを欲する也。して氣血を鼓動し奮起  
を去れて邪を逐ふ状ハ。はば人身の氣ハ周身に弥綸して

活機運用するもみちて臟腑小在てハ呼吸を起し。飲食を  
醸化する也。言も更な味を。附子ハ常の飲食小ハ大く異  
な味大毒小。動もすまバ氣血を損傷をむせける物なれ  
バ。そ其内氣の惡<sup>キ</sup>ハ憎みて。其也競牙味小。して勢を奮起  
し。勢を奮起する小。して進みて邪を逐小至るなり。亦  
人身自然の勢小。りて然る能ハある也。漢方小も是小  
等きこと有て。仲景ハ桂枝附子湯。桂枝附子去桂加朮湯。甘  
草附子湯の如きハ。皆二枚を用ふ。是毒をもて毒を逐ふ  
なり。故小桂枝附子去桂加朮湯の方後小曰く。其人如胃狀  
勿怪。即是朮附竝走皮中逐水氣未得除。故耳也。又氣血

を鼓動以るハ。桂枝附子湯。桂枝芍藥加附子湯。麻黃附子  
甘草湯。麻黃附子細辛湯。眞武湯。附子湯。四逆湯の類あり。こ  
ハ一枚を用ふ。而して以ふ温裏救裏。或云ふ發汗也。其差別  
以也明のあり。此れ附子を用るに其法を二途小分法所由  
れ也。より宋元以降の説小從ひて温補を説るあり。言小  
も足らぬ非説也云々。毒豈氣血を補ハむや。論を俟ざる  
ことあり。

和氣 出雲藥

耶万比中良岐中 加波夜那岐大之 加多甫曾中

耶万世利中 波自加民中之小

大ま本方の内にて。耶万ヤマ加賀民カガミ耶万比ヤマヒ良岐ラギ小更コカたり  
あり。さて耶万比ヤマヒ良岐ラギハ黄芩。加波夜那岐カハヤナギハ水楊皮。耶万  
世利ヤセリハ當歸。加多甫曾カトフソウ波自加民ハジカミハ前小出マエコデ。方義ハヤシハ黄芩。苦  
と濕潤ミツクありて。とく氣血を推鎮オシメ免て。熱サマを清サマし。乾燥を潤ヌルは。  
水楊皮スイヤウヒ淡く瀉シヤクと志て。氣血キケツ多順タジュンし。擾亂ユウランを治免オシメ。當歸トウキ甘く香  
と濕潤ミツクありて。急を緩免オシメ。乾燥を潤ヌルは。半夏ハチマの簽シき。生薑シヤウキヤウの辛  
と香カた。當歸トウキ乃香ニハカき。相合アヒせて微ヒキく開發カハク意イを帶オシメて餘邪ヨリヤを  
散チリぶるなり。一方ヒトツ此主能コノチノチノチハ。餘邪ヨリヤを散チリじ。乾燥カンバウを潤ヌルは。氣血キケツ  
を鎮免オシメ。熱サマを清サマは。此方コノツ主能チノチ。小柴胡湯コソサイコトウ小逆コギャクし。然シカも彼カノを以モ  
ふ解外トクゲ又マタ以モハと蒸シヤウく而振シメ。卻發熱汗出セキハツツキ而解トク。また身ミ澱然シヤウゼン而

汗出解也。此以牙也。何ぞを依効の有すべき。若さる効何らむ  
ふ。それは多其時に去て然るもの小て。定まり多依能を  
ハ云はらる。彼亦清解を主とすべき。正しく此方の行所  
小去て。彼方を用牙バ。かから交効あ依はし。

然而大邪之感人。有内外兩感者。外閉腠理。内屈藏氣。比之  
於前證重一等。

然而大邪之感人。然而上を受て端を更えて以起以  
辭。大邪ハ字の如し。感人ハ感と韻會小感觸也也。人小  
感觸はるなり。○有内外兩感者。内外兩感ハ。皮毛藏府一  
時小邪に感觸はる小て。邪外毛竅より入て皮毛小客り。内

口鼻より入て藏府に留るなり。傷寒例小陰陽兩感也。以牙  
依効ハ大小異也。彼ハ陰經陽經ともに感するをいひ。こ  
を内外一時小邪に感するなり。思ひまがふはらる。但  
太陽與陽明合病也云も小少一似多る大也。何也。そハ彼  
合病自下利す依者ハ。此證乃緩きえ小當るあり。去と猶  
後小以ふを依はし。傷寒活人書小兩感の説あり。其義こ  
に同く去て其證論ずるところ異也。こも亦下小引て  
辨はし。溫疫論小表裏分傳也。以牙證大ハに近し。○外閉  
腠理。内屈藏氣。腠理ハ素問皮部論小邪之始入於皮也。泝  
然起毫毛開腠理也。ある註小。腠理皆謂皮空及文理也。何

り。傷寒論。太陽中篇。血弱氣盡。腠理開。邪氣因入。之。あり。即ち毛竅あり。和名鈔に。腠理和名之。和支とあるハ。從ハ難シ。藏氣ハ。藏府の氣あり。語ハ。素問の藏氣法時論。小をきて。外。小志て。腠理毛竅を閉ぢ。内。小志て。藏府の氣。字屈。以。る。残。以。ふ。なり。○比。之。於。前。證。重。一。等。前。の。劇。證。小。比。ぶ。ま。ハ。一。等。重。き。あり。抑。内。外。兩。感。の。目。ハ。志。も。神。遺。方。に。ハ。關。あ。り。ま。す。予。が。數。年。實。事。小。試。る。に。必。か。く。な。く。て。ハ。之。思。ハ。依。ら。ず。止。こ。じ。得。じ。私。小。立。た。る。を。亦。々。々。人。々。考。試。み。て。よ。

其初起寒熱俱劇心下痞鞭乾嘔不能食脈堅大而數者此

其候也。

初起 同春。入門等小。傷寒初起。痢病初起。亦。數。多。見。え。る。即。ハ。ジ。メ。之。以。ハ。む。が。如。し。○寒熱俱劇。上。小。云。る。が。如。く。惡寒發熱。其。劇。甚。矣。依。な。り。○心下痞鞭。乾嘔。不能食。心下痞鞭ハ。心下に塞りて。鞭。き。も。乃。を。云。牙。依。小。す。神遺方。阿。和。波。紀。門。小。牟。奈。斗。治。之。り。乾嘔ハ。乾ハ。乾燥の乾。小。同。く。カ。ワ。ク。義。亦。る。殘。今。借。て。無。物。乃。義。也。以。嘔。ハ。景岳全書。嘔者。有聲無物。吐者。吐出食物也。とあり。但。聲。の。み。あり。て。物。を。吐。出。さ。ず。依。な。り。乾嘔。と。乾。の。字。殘。加。る。も。仍。物。を。出。さ。ず。依。故。の。義。れ。り。近頃伊藤子徳。之。以。て。儒。者。の。著。せ。る。傷寒論。

文字攷小。嘔與乾嘔。但是文之詳略。絶無異義。嘔本無物。故詳言之。則曰乾嘔。略言則單曰嘔。其有ハ。以ハ得る説あり。さてこそきを神遺方小ハ。多万比之ハ。以ハ。俚語のカラエツキあり。不能會ハ。聞えたるガ如シ。如此ク寒熱俱劇ハ。皮膚閉塞甚ク正邪表位小分争以るなり。心下痞鞭乾嘔す。依ハ。正邪裏位小分争シ。上衝して心下に聚ま依者ハ。○脈堅大。而數者。堅ハ。上小云牙。大ハ。脈傳小。大於絃絲也。此爲血亂也。其ハ。數ハ。上小云牙。これ氣血結實擾亂の候也。以るなり。○此其候也。此ハ。寒熱云々。此小至る脈證を指れり。其也。兩感字指レ。候と證候の候も。内外兩感の

證候也。以るあり。

當先攻其表。後治其裏。宜乃甫之藥。加多万加波與之。以發汗逐邪也。

當先攻其表。後治其裏。當ハ韻會小。主當也。字典小。理合。如是也。其あり。先ハ。下乃後小對して言ふ。先こそきを爲し置て。後小彼多爲レ。以云。許の義あり。攻其表ハ。發汗して其邪。逐除す。依字云ふ。發汗を攻表也。以ふ。傷寒論。太陽上篇に。與桂枝湯。欲攻其表。此誤也。また厥陰篇に。攻表桂枝湯也。あり。後ハ。先小對して云ふ。治也。治療乃治小。韻會小。理也。其あり。てヲサムル義。其裏ハ。上ハ。心下痞鞭以下藏府の裏

位小何る證をさすあり。○宜乃甫之藥加多万加波與之以  
發汗逐邪也。宜ハ字彙小。適理也。吉益氏云。宜權宜  
之辭。權宜其證置治方也。以牙り。加多万加波ハ。上小も言  
牙る如く。蜀椒ハ。氣味辛烈小。て多量に用ひ難し。故小桂  
枝を加牙て其便小從ふ。凡此湯を用ふるにハ。桂枝を加ふ  
るを宜と。與之以下聞えたるが如し。溫疫論。內壅不汗篇  
小。邪發於半表半裏一定之法也。至於傳變。或出表入裏。或表  
裏分傳。豎見有表復有裏。乃引經論。先解其表。乃攻其裏。此大  
謬也。はた見表裏分傳證。務宜承氣先通其裡。裡氣一通。不待  
發散。多有自能汗解とあるハ。己の新説小拘て發汗の効

何る事を知らざればなり。承氣を用ふるを疑はれ。裏邪解はる  
とも。表邪反りて陷入して仍解をばはれ。若能汗して解  
するもの何りとも。それは多稟賦壯實れるも乃小去て。幸  
ひ小解はるに去る。故小多有自能汗解と。以牙り。多有の二  
字を味いて。必解はるに非ざれば。亦覺るべきあり。

而不惡寒反惡熱。識語煩渴。舌上黑胎者。此外邪已解。乃可  
治裏也。

而不惡寒反惡熱。反ハ正の對。反掌の反小。昨日まで惡  
寒せしが。掌を反は如くに。今日ハ加牙て惡熱す。亦あり  
惡熱ハ。惟忠曰く。裏熱煩熱。痰熱蒸。發熱。是皆屬惡熱也。



以牙り。亦もむ志く。也惡ま志きはで熱はるれ也。裏位  
小邪氣ありて正氣也分争はる故小。氣血擾動して發る熱  
也也。○譏語煩渴。譏語ハ。譏也。字彙小。尼兼切。病人自言也  
也何りて。即神遺方に。古斗久流比也。ある是也。煩渴也。上  
乃煩疼の下に以牙は如く。渴の甚きれり。此みな裏氣の擾  
亂志て上衝はる也。○舌上黑胎者。神遺方小。之多久路  
介豆支。まも久呂美曾通支也也。こも裏位小熱盛りな  
る者小也。漢に以ふ陽明病小當きり。○此外邪已解。此也。  
不惡寒以下也。證を指は。己也。韻會小。訖也。也何りて。俚語の  
モハヤの意。皮膚分肉の外邪已に解散して。裏邪獨在る候

也すはなり。○乃可治裏也。乃也。字彙小。爲繼事之辭也。何  
りて。俚言のソシテカラの意也。可治裏ハ。聞えもは。か如  
し。こも所謂陽明病也。正證小志て。眞の裏證あり。按小病こ  
ゝに至ると。大かた内外兩感より來も。小して。漢説の如  
く大陽少陽陽明也。漸次をもて傳入すは。も乃小ハ非ざる  
也。若漸次をて傳入はるも。小あらむ小也。そまは多氣  
血虛弱にして。邪小勝こ也。能ざるに。もは。小なま。バ。裏氣  
邪の爲小屈えら。志。分争志て熱を志は。志。能ハ。げ。る。故小。  
遂に厥冷下利等の證を見志て。少陰病小轉也。若正氣  
強盛にして。邪小勝もらむ小ハ。病重し也。以ふ也。も。半表半

裏分肉小して罷みて。藏府の裏小入といふ理あるはら  
交。さ北バ神遺方。乃俚和多良依の篇小。須惠余登豆雷母乃  
波。乃保世互由雷免云く。毛登余志豆免流毛乃波。乃保世互  
免久良世云く。奈加余阿都万雷毛乃波。能保世安久倍之云  
く。此何るハ。皮膚分肉藏府也漸次をもて傳入はるも其ハ  
共小發表すば一也。以牙はなき也。其藏府小入をの。即て  
少陰病小。附子乾薑もて裏氣を鼓動し。發表去て邪を  
逐を以牙るにて。これ定則なり。少陰裏證に。附子乾薑を用  
ふる字バ。仲景こそを温む  
る。以ひ。また救裏也。以牙也。今發表也。以ふを。異む徒もあ  
る。牙なき也。そと經驗鈔小。詳小辨牙あるを見て知はし。  
か小。あくに兩感の證小非ざれば。病こゝに至も其小非ざ

る。此也。よく心を平らにして。實事小試みて辨ふはし。

與元加里藥以驅内邪鎮裏氣則愈。

上の心下痞鞭乾嘔以下。みか腹内小雷在せは邪の爲小迫  
塞せられて裏氣擾亂して。上衝去て心下小結はるも其小  
て。乃俚和多良依の篇。奈加の條小。牟寸夫毛乃波。非良岐互  
加與波之。よも加吳万流毛乃波。於之非良岐。また差伽乃保  
流母乃波。久太之互加反之也。あるに従ひて。治む牙き證な  
まバ。元加里藥を與牙て。内藏小所在の邪を驅逐し去り。裏  
氣の上逆を推降し。擾亂を鎮むるときも愈るなり。はる如  
此先後をもて。治するハ如何を云小。内外兩感の證を。表

多攻る哉先を先して心下痞鞭乾嘔の裏證を先を先して  
推降逐下の劑を投げるべきハ藥力小引のれ氣血退たて  
内に沈む氣血退きて内に沈むやたハ外邪も亦そまに乘  
トて藏府小侵入ははしこま表を先して裏を後小すは  
所以あり抑此内外兩感の治法ハ志も己の考得て年來試  
みたるう牙に如此定免はるを亦太陽中篇ハ心下痞惡  
寒者表未解也不可攻痞當先解表表解乃可攻痞解表宜桂  
枝湯攻痞宜大黃黃連瀉心湯まゝ太陽病云々其外不解者  
尚未可攻當先解外外解已但少腹急結者乃可攻之宜桃核  
承氣湯ふどあるを思ひ合せて辨ふはし。

仍讖語不止如見鬼狀者

氣血擾亂益甚く上衝も亦劇きあり。

加久路加祿乃比知古可以降上逆鎮神氣

久路加祿乃比知古ハ鍼砂あり。此を加牙て氣血の上逆  
を推降し神氣の擾亂を推鎮むべきハ愈はきあり。

元加里久壽理 神遺方

方名の義ハよ考得交。

衣耶美奴久美波解師久無祿布差賀里以多味之多加和  
紀寸久美久呂美曾通支以支連民美之比古斗久流比  
之久曾斗治以婆里阿加民亦吳里又智久曾古支寸流毛

乃 余阿多布

原本布差賀里の字あり。今活人小試る小。乃く施して去き残ありてり。以下圈字施を施も此こき小做牙。

溫疫熱甚く。心下痞痛。舌乾燥。緊縮。黑胎。心煩て。耳聾。譫語し。

不大便。小便赤濁。又下血す。涼者小與る方ぞ也。邪

臟腑に入て。正氣と相争ひて。上衝す。涼も乃小宜き方也。

之保以師中

於保之乃祿中

久良小之

免岐小之

加良多智小

耶万非良中之岐小

宇里根大之

加乃

余解區差中

之保以師と之良以之の誤小て石膏あり。於保之乃祿ハ大黃。久良ハ苦參。免岐ハ小蘗。加良多知ハ臭橘。耶万非良ハ

岐ハ黄芩。宇里祿ハ括藎根。加乃爾解區差ハ人蔘あり。此

方之保以之を之良以之の誤小て石膏を以るハ。如何小也

云に。之保以之ハ凝水石にて。苦く鹹く。主能大の朴硝小

同く也。唯毒あり故小大便を下に能少し。さてもこも此

主治小ハ合津けき也。亦ほ按小此方作劑のさる。他の方々

りも多味あるに。何れも苦味の物此みあるハ。多味作劑の

體小あら也。凡作劑單味あるハ其能の速ならむこ也を欲

し。多味あるハ寛く小効を奏せむこ也。故欲はるなり。其速

ゆるらむこ也を欲はるも此ハ。氣味の厚薄小拘ら也。寛くに

効を奏せむこ也。故欲はるも乃と。氣味の薄らむこ也。故

欲ほるなり。故小凝水石小くハ氣味厚く去る。其他の味厚  
きを乃ど配劑去てハ服ほる小堪ざるはし。是之保の保ハ  
書寫の誤小く。之良以之亦也ほる所由なり。故今石膏を  
用ふ怪しむことれ可也。方義ハ。石膏淡く重く。氣血伐順  
らし。上衝を降し。熱を消し。渴を止免。擾亂伐鎮む。大黃苦く  
瀦く。臭る有り。膏潤あり。毒ありて。よく解け難き凝結を解  
き上衝を降し。乾燥を潤し。大便を利して邪を去る。苦參臭  
橘の大小苦く臭た。小檗の紙<sup>モク</sup>苦き。人參。黃芩の濕潤ある。括  
婁根乃微苦く滑澤<sup>ナメラカ</sup>ある。相合せて凝結を開き。上衝を降し。  
乾燥を潤し。石膏大黃其能を助く。一方の主能ハ。凝結し

て解け難きを解た。上衝を降し。擾亂を鎮免。乾燥を潤し。熱  
を消し。渴を止免。内邪伐大便小導き去る。此方。漢方ハ大柴  
胡白虎二湯の能を兼あり。又大黃石膏の分量を増減はせ  
バ。溫疫論乃柴胡清燥。柴胡養榮。承氣養榮の諸湯。及び黃龍  
湯の意味有り。又大黃を羊蹄小代せバ。參胡芍藥湯。柴葛解  
肌湯等の意小近く。又三黃加石膏湯。生地芍連湯など其證  
小も効あははし。又此劇證小く。喘欬。或ハ噓逆を發する  
もの有り。大した此湯を與るに宜し。若甚しきを其ハ。喘欬  
にと城上藥。噓逆にと八紀藥。小石膏。若ハ大黃を加す。これ  
を與て其急を防ぐはし。又此劇證の甚しき小至りてハ。

瞬目の間小傳變して。發汗下劑一日の間小轉投はる小非  
ぞ此バ救ハせざはこも何也。こも溫疫論小。急證急攻の篇  
有り参考は牙一。ぞて又此證小して發斑するも此あり。去  
と傷寒論小と治論闕たせ也。同春小。熱氣乘虛出於皮膚而  
爲斑也。輕如疹子。重則如錦文。云々。黑斑主不治也。有り。入門  
小も同説有りて。忽小は牙のらぞは證にて。其色紅きを半  
生半死。黒き八九死一生也。此方を與るに宜し。溫疫論。發  
斑戰汗合論篇小。疫邪留於氣分。解以戰汗。留於血分。解以發  
斑。云々。所以從戰汗者。可使頓解。從發斑者。當圖漸愈也。あれ  
然。然小何ら。邪小因て周行の血敗腐して。其色或皮面に

見ハすも此ふれば。最悪候也。は牙し。此方甚効あり。又下血  
はるを此あり。傷寒論小も往々論あり。又溫疫論。畜血篇小  
も論じたは如く。危殆の證あり。黒色なるハ此方の證あり。  
若そを鮮紅あらば。此方此宜き所小非也。後の緩證の下小  
其治法云々。又上の證小也。自汗盜汗する也。何り。  
驚悸のら。又溫疫論小。從外解者云々。或戰汗狂汗自汗盜汗  
也。何る如く。邪本らむとすは候あり。

若心下痞鞭。按之痛者。與保乃加衣藥推而降之。

若心下痞鞭。氣血上衝して心下小結ぶるなり。○按之  
痛者。抑結の甚しきれり。○與保乃加衣藥推而降之。乃

里リ和多ワタ良ラ依エ乃ノ篇ハ小コ。差サ加カ廻ノ保ボ流ル母モ廻ノ波ハ於オ志シ貞テ久ク太タ之シ也シ。あ  
は小コ從スひて。上ウ衝セウを推ス降カすなり。こゝ漢方の大柴胡湯小近  
し。

保乃加衣久寸里

神遺方

津守連乃方

方名此六、ろ詳あら文

衣耶味乃奴久美介波介之久。久智加和支リ乃牟度加和  
支之底。牟祿布差加里以多味之多久路介通支。加味波支  
之。以波里阿加民。又久曾非里寸流毛乃。

温疫身熱甚く。口燥咽乾。心下痞痛。舌上黑胎。嘔逆。小便  
赤濁。又下利する者の方ぞ也クなり。此と上の元加里モトカリ藥の證

小志て。一等輕きも乃を治はる方なり。

阿波穗小

於保之乃祿中

耶万世利大

免乃木

小之

久良小之

阿波穗アハポハ外麻ハあり。其餘ハ前ハ小コハ牙ハり。方義ハ。大黃ハ既  
小云牙ハはが如く。凝結を解き。上衝字降し。乾燥を潤し。大便  
を利し。邪を去る。當歸甘く香く潤ありて。急を緩免。凝結を  
開き。乾燥を潤し。大黃の能を助く。外麻。苦參の苦く臭き。小  
檉の單小苦也。相合せて大黃の力伐助けて凝結を開き。上  
衝字降し。はて大黃の利功小任は。まゝ温疫論。大便篇小。協  
熱下利云く。至午後潮熱便作。泄瀉也。ある證。また熱結旁流

者云く。續得<sup>キテ</sup>下利<sup>クシ</sup>純臭<sup>クシ</sup>水<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>牙<sup>ヲ</sup>添<sup>テ</sup>證<sup>ス</sup>。共<sup>ニ</sup>小<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>湯<sup>ヲ</sup>小<sup>シ</sup>宜<sup>ト</sup>。そを  
此<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>の證<sup>ヲ</sup>小<sup>シ</sup>下利<sup>クシ</sup>を舉<sup>ゲ</sup>多<sup>ク</sup>考<sup>ヘ</sup>ふ<sup>レ</sup>。一方<sup>ノ</sup>の主<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>凝<sup>ル</sup>結<sup>ス</sup>  
を解<sup>ス</sup>。上<sup>ニ</sup>衝<sup>ク</sup>を降<sup>ス</sup>。一<sup>ニ</sup>乾燥<sup>ス</sup>を潤<sup>ス</sup>。内<sup>ニ</sup>邪<sup>ヲ</sup>を大<sup>ニ</sup>便<sup>ス</sup>。小<sup>シ</sup>導<sup>キ</sup>去<sup>ル</sup>。

不大<sup>ニ</sup>便<sup>ス</sup>腹<sup>ヲ</sup>滿<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>與<sup>テ</sup>上<sup>ニ</sup>加<sup>リ</sup>藥<sup>ス</sup>下<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>便<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>緩<sup>ク</sup>裏<sup>ニ</sup>氣<sup>ヲ</sup>。

不大<sup>ニ</sup>便<sup>ス</sup>腹<sup>ヲ</sup>滿<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>神<sup>ノ</sup>遺<sup>方</sup>小<sup>シ</sup>。不大<sup>ニ</sup>便<sup>ス</sup>を久<sup>ク</sup>曾<sup>ト</sup>斗<sup>ト</sup>治<sup>セ</sup>以<sup>テ</sup>ハ腹<sup>ヲ</sup>滿<sup>ス</sup>  
ハ波<sup>ハ</sup>良<sup>ク</sup>不<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>里<sup>ク</sup>也<sup>ナリ</sup>。以<sup>テ</sup>牙<sup>ヲ</sup>添<sup>テ</sup>證<sup>ス</sup>。共<sup>ニ</sup>小<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>湯<sup>ヲ</sup>小<sup>シ</sup>宜<sup>ト</sup>。そを  
多<sup>ク</sup>良<sup>ク</sup>依<sup>テ</sup>の篇<sup>ヲ</sup>。奈<sup>カ</sup>加<sup>フ</sup>の條<sup>ヲ</sup>。多<sup>ク</sup>太<sup>ク</sup>與<sup>テ</sup>比<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>滿<sup>ス</sup>連<sup>ス</sup>留<sup>ス</sup>。牟<sup>ト</sup>寸<sup>ヲ</sup>夫<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>乃<sup>カ</sup>加<sup>フ</sup>  
多<sup>ク</sup>岐<sup>ク</sup>母<sup>ノ</sup>乃<sup>カ</sup>等<sup>ニ</sup>に當<sup>テ</sup>り。○與<sup>テ</sup>上<sup>ニ</sup>加<sup>リ</sup>藥<sup>ス</sup>下<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>便<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>緩<sup>ク</sup>裏<sup>ニ</sup>氣<sup>ヲ</sup>。下<sup>ニ</sup>  
大<sup>ニ</sup>便<sup>ス</sup>ハ。乃<sup>カ</sup>俚<sup>ク</sup>和<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>良<sup>ク</sup>依<sup>テ</sup>の篇<sup>ヲ</sup>に於<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>比<sup>テ</sup>久<sup>ク</sup>太<sup>ク</sup>紀<sup>ス</sup>。互<sup>ニ</sup>夜<sup>ヲ</sup>布<sup>ヲ</sup>里<sup>ヲ</sup>な  
せ<sup>テ</sup>何<sup>レ</sup>も小<sup>シ</sup>當<sup>テ</sup>りて。推<sup>シ</sup>逐<sup>シ</sup>碎<sup>ク</sup>破<sup>ス</sup>ふ<sup>レ</sup>。緩<sup>ク</sup>裏<sup>ニ</sup>氣<sup>ヲ</sup>ハ。裏<sup>ニ</sup>氣<sup>ノ</sup>の結<sup>ル</sup>ほふ<sup>レ</sup>。

て。水<sup>ヲ</sup>血<sup>ヲ</sup>也<sup>ナリ</sup>共<sup>ニ</sup>小<sup>シ</sup>凝<sup>ル</sup>滯<sup>ス</sup>也<sup>ナリ</sup>。腹<sup>ヲ</sup>滿<sup>ス</sup>せる字<sup>ヲ</sup>。開<sup>キ</sup>行<sup>キ</sup>ら<sup>セ</sup>て緩<sup>ク</sup>む<sup>ス</sup>  
れり。

上加<sup>リ</sup>久<sup>ク</sup>寸<sup>ヲ</sup>俚<sup>ク</sup> 神<sup>ノ</sup>遺<sup>方</sup> 津<sup>ヲ</sup>守<sup>リ</sup>連<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>方<sup>ヲ</sup>

方<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>のこゝろ考<sup>ヘ</sup>得<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>

衣<sup>ヲ</sup>耶<sup>ク</sup>美<sup>ク</sup>身<sup>ヲ</sup>奴<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>美<sup>ク</sup>波<sup>ク</sup>解<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>久<sup>ク</sup>。久<sup>ク</sup>智<sup>ク</sup>加<sup>フ</sup>和<sup>ク</sup>支<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>多<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>呂<sup>ク</sup>民<sup>ク</sup>牟<sup>ク</sup>禰<sup>ク</sup>  
波<sup>ク</sup>良<sup>ク</sup>布<sup>ク</sup>差<sup>ク</sup>賀<sup>ク</sup>俚<sup>ク</sup>布<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>里<sup>ク</sup>。加<sup>フ</sup>和<sup>ク</sup>紀<sup>ク</sup>。互<sup>ニ</sup>水<sup>ヲ</sup>乎<sup>ク</sup>古<sup>ク</sup>能<sup>ク</sup>味<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>良<sup>ク</sup>比<sup>ク</sup>母<sup>ク</sup>乃<sup>カ</sup>  
久<sup>ク</sup>流<sup>ク</sup>比<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>互<sup>ニ</sup>。阿<sup>ク</sup>世<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>多<sup>ク</sup>里<sup>ク</sup>。民<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>比<sup>テ</sup>寸<sup>ヲ</sup>流<sup>ク</sup>毛<sup>ク</sup>乃<sup>カ</sup>介<sup>ク</sup>阿<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>反<sup>ク</sup>互<sup>ニ</sup>  
與<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

温<sup>ク</sup>疫<sup>ク</sup>身<sup>ヲ</sup>熱<sup>ク</sup>甚<sup>ク</sup>。口<sup>ヲ</sup>燥<sup>ク</sup>。舌<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>黑<sup>ク</sup>。心<sup>ヲ</sup>腹<sup>ヲ</sup>痞<sup>ク</sup>滿<sup>ス</sup>。渴<sup>キ</sup>きて水<sup>ヲ</sup>を飲<sup>ム</sup>む<sup>ス</sup>  
欲<sup>ス</sup>。讒<sup>ク</sup>語<sup>ク</sup>也<sup>ナリ</sup>。汗<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>耳<sup>ヲ</sup>聾<sup>ク</sup>者<sup>ハ</sup>小<sup>シ</sup>與<sup>テ</sup>牙<sup>ヲ</sup>添<sup>テ</sup>證<sup>ス</sup>。共<sup>ニ</sup>小<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>湯<sup>ヲ</sup>小<sup>シ</sup>宜<sup>ト</sup>。そを



と邪臟腑不狂て。凝滯して上衝する者を治むる方なり。

加良多智小之 大之乃祿大 依比寸祿中

久良小之 支波太小之 耶万之保中

依比寸祿ハ芍藥耶万之保ハ朴硝なり。其餘と前小以なり。

方義と。大黃ハ上小云る如く。凝結を解き。滯畜を推逐す。

乾燥を潤し。大便を下し邪を去る。硝石ハ苦く鹹く重く

濕潤あり毒ありて。滯畜を推逐し。堅結を碎き。乾燥を潤し。

擾亂を鎮免。大黃と力を合せて。大便を下して邪を去る。臭

橘。苦參の苦く臭き。黄蘗の苦た。芍藥の淡苦き。相合せて凝

結を開き。滯畜を推降する。大黃硝石の下に能ふ任は。一

方の主能ハ。滯畜を逐し。乾燥を潤し。堅結を碎き。大に大便

を下して邪を去る。此方主能全く大承氣湯小同ト。かくて

此方の證くく止まらば此方も。今ハ其一端を擧るのみ。

痞滿燥實の證あるも此小ハ廣く用いて逐下すはきなり。

溫疫論。注意逐邪勿拘結糞篇小。溫疫可下者約三十餘證。不

必悉具。但見舌黃心腹痞滿。便於達原飲加大黃下之也。ある

證を始をせして。大柴胡及び三承氣の證小至るまで。能く

参考して。下證あるそのハ猶豫を交用して下はきなり。

若脈不强堅腹不堅滿者。雖不大便六七日。慎勿下之。當隨

前方治之。

若脈不强堅。氣血強盛形らざるなり。○腹不堅滿者。以  
まふ結實をざるあり。○雖不大便六七日。慎勿下之。雖ハ。  
玉篇ハ。兩設也とあり。タトヒセイトモセ兩譯なり。多  
ハ六七日大便せざれば。結實せざらむ限ハ。慎みて  
上加里藥など用いて大便を下にせしむれば。禁るあり。  
下にせきハ氣血虚憊して。遂に下利止ざらば。證をれらむこ  
を恐るゝあり。傷寒論。陽明篇ハ。陽明病。心下鞭滿者。不可  
攻之。攻之利遂不止者。死。此を思ふべし。○當隨前方治  
之。前の保乃加依藥。元加里藥等を與ふ。推降して。邪を輕  
く大便あり導くを宜しとす。

後氣血不和。不了者。與國玉藥。可以知之。

後氣血不和。不了者。後ハ。前治ふて。内邪解して。後  
形り。不和ハ。和調をざるなり。不了者ハ。傷寒論條辨に。了  
猶惺々也。有り。俚語のサツパリトセザルあり。○與國玉  
藥。可以知之。國玉藥ハ。元勞瘵の治方なる也。今轉じて  
これに用ふる形り。和之ハ。即ち調和する字云ふ也。世ハ。疾  
豎家セ云。牙る豎流の如此證ハ。必毒有るべし。形也云ハ  
病。微之の證候を索えて。そき小對し。多法を處して。仍  
病。消除のむせする也。なれど。そきも惡き也。バの也。に  
非ざれば。も。仍此證ハ。ありてハ。後世の補中益氣湯也。與

るかた勝まり也見也。國玉藥ハ補中益氣湯也主能近きも  
みあり。然きど補中益氣おど云ハ。藥能の本旨疾病の本理  
字知らばるも乃小て。謬を以て。さて此門小も方在保祿  
豆万里門也。有りて。藥方載ばるも。今意得や以らむ  
爲小。舉て辨牙む也。以。そと

國玉藥 神遺方

波度加民 大 耶万世里 中 耶万以毛 大 万都保度 大

加乃介解久佐 小

波度加民ハ羅摩。耶万以毛ハ薯蕷。万都保度ハ茯苓。其餘ハ  
前小ハ牙り。方莪也。人參苦く甘く濕潤有り。上衝を降し

鬱滯を開き。乾燥を潤し。急を緩む。當歸甘く香く濕潤あり  
て。人參の開き緩免潤以能を助り。羅摩根淡く微苦く去て。  
氣血を順ら以中。微く推す能を兼て。人參の推開く能を  
助け。薯蕷茯苓共に淡く。く氣血を行らし。人參の開く能  
を助く。一方此主能ハ。氣血を順らし。上衝を降し。鬱滯を  
開き。乾燥を潤し。急を緩免。く中和を致し。内外を調理以。  
豎或不要發汗以去邪。唯視其熱而療其熱。故有熱去而邪  
不。去氣血爲之傷害。漸衰憊至危者。  
豎或不要發汗以去邪。豎ハ。或曰く。傷寒論中。豎何く也  
有り。皆他豎何く也。去て見ば。以牙り。不要ハ。要ハ。孝

經小。天下之要道。注疏に窮理之至也。とあり。さ此に至要を  
きば。遠あり。外より來る邪と外より除くより近きハれし。  
發汗して邪を去らば。邪はと何所より去らむ。○唯視  
其熱而療其熱。唯ハ唯獨の義。小て專の義なり。視ハ。說文  
小瞻也。とあり。療と。說文小療治也。とあり。周禮天官瘍醫に。  
凡療瘍以五毒攻之。注に。止病曰療。とあり。他醫唯其熱を  
伐視て。熱即ち邪あり。として。外邪の去や否をも辨別せざ  
して。柴胡白虎の類多用して熱を清し。甚きハ邪の所在を  
も診別をせして。猥小攻撃して其熱を除くを云ふ。○故有  
熱去而邪不去。氣血爲之傷害。漸衰憊至危者。こと發散を

せして。清熱のみを專とせしから。熱ハ去るれども邪も仍  
去らば。るゆゑに。氣血其邪の爲に傷害をらむ。漸く小衰憊  
して。遂に危篤小至るをいふ。病此小至りてハ。邪あり。と  
いふ。牙也。も汗下も行ひ難くて。手を束ぬることあり。こと傷寒  
論小も。太陽上篇に。太陽病外證未除而數下之。遂協熱而利  
云々。桂枝人參湯主之。よも太陽病。桂枝證。豎反下之。利遂不  
止云々。葛根黃連黃芩湯主之。よも傷寒脈浮。發熱無汗。其表  
不解者。不可與白虎湯。とあり。また溫疫論。妄投寒涼藥論  
小此辨あり。就て見ゆし。

是其以不察熱也者。氣血之擾動而非邪。所以爲熱者。是邪

故也。

古に既小首章の下に言は如く布差岐和邪依の篇を考ず  
て知らぬことなり。然れど此誤ハ多し當今の醫乃み小  
何ら其因て來ること遠くして素靈ハ更なり。祖書せせ  
る傷寒論ハすら熱入膀胱ま多熱入血室など云すは熱  
を邪を去るも小大なる誤なり。こ乃古ハ既小或問  
の書小にも云す。

吾門專以驅邪爲要而以消熱不爲先矣。此所以專發汗也。  
此ハ聞えたるが如し。溫疫論ハ注意逐邪勿拘結糞と云ふ  
篇字立て。邪を逐ふを要せざる旨論トたはも。下劑を發

汗を其異ハ何れども以て理多はこれなり。

緩證脈軟弱而數汗自出者此爲正邪俱緩弱。

緩證 上文小寒熱疼痛不甚者此爲緩證也あるを指せる  
なり。其字再び此小舉て其脈證並小治法を論ぜむとほる  
あり。○汗自出者 發汗を俟て汗の自然小出る字云  
ふ。さて劇證ハ皮膚毛孔の閉塞甚く去て汗出さずを。此證  
ハ閉塞甚しからげり故小汗自然小出るなり。○此爲正邪  
俱緩弱 正氣も邪氣も俱小緩弱を証して劇證の正邪  
俱小強盛ある者も自のら異なる也。

不可強發汗強發汗則恐氣血虛憊而終不愈。

強て發汗するときは氣血虚憊して汗遂に漏れて止まらぬ。彼漢  
説云云牙は亡陽の證也れ也。終に救ふべきならざるに至  
むことを恐るゝあり。こゝハ傷寒論桂枝二越婢一湯の條ハ  
脈微弱者此無陽也不可發汗也云ひ。まゝ大靑龍湯乃條に  
若脈微弱汗出惡風者不可服服之則厥逆筋惕肉瞤此爲逆  
也何るを思はし。

但當順氣血而微々發汗則邪自去出雲藥主之。

但ハ六書正譌ハ本訓裼偏脫衣袖也。借爲語辭也ありて。も  
之偏肩ぬぐ意あり。語辭也あるにて。レカレドモ又タ  
レホド也云ふに當れり。上の劇證を異れども。和氣藥乃甫

之藥等の辛香劇發の劑乃宜しき所ならざる。當氣血を  
順に劑伐與て微々發汗す法をもて宜しき以然する  
べきハ外邪自ら去るべき也。こゝにも出雲藥を主とす  
て用ふべきなり。

出雲久寸俚 神遺方

出雲國意宇郡木好所傳元 大己

貴尊之方 奈里。

方名所出小々也。

依也美世奈宇那自以多味大身奴久味母太依久流之  
美久智加和支師多美曾介豆支乃味久比世受以波里阿  
加牟母乃余阿多布。

こと。温疫項背強痛身熱苦煩口舌乾燥舌上有胎飲食不進  
小便赤濁者小與方ぞを以て邪皮膚小在て其腦  
み分肉臟腑小及を小與ふ方なる哉今ハ少の轉トて  
臟腑小かくらぬ證に用ふるあり。

耶万加賀民

大之

加多甫曾

加波夜那岐

大之

耶万世利

中之

波自加民

中之

耶万加賀民ハ羅摩根あり其餘ハ既小も以て牙をバハはば  
方義と當歸甘く香く滋潤ありて々々急を緩免氣血は  
外せ閉塞を開き徐々小汗を發はる中に滋潤を專として  
津液を耗竭せざらしむ生薑の辛く香き半夏の發泡相合

せて當歸の開發の能を助く羅摩根淡く微苦く氣血を順  
らし健剛あらして邪を逐ふ水楊皮淡く微瀼く順ら  
中微小閉る意を帶て發汗中微小氣血を擾亂をざらしむ  
一方の主能ハ氣血を順らし健剛にして進まし免閉塞  
を開き徐々に微汗を發し邪を去あり去漢方の柴胡桂  
枝湯の意小近し。

若舌上黃胎乾燥而渴或日晡所發熱妄語者宜作前方加  
加乃余解若於字與之以進氣血逐邪

若舌上黃胎乾燥而渴是は多邪分肉小入る證ありさ  
此ハ前の劇證小異ありて舌上黃胎になれども胎厚の

ら。乾燥すも甚しから。渴は云々も引飲小至らざるなり。○或日晡所發熱妄語者。こめ亦前の劇證の如く小ハあらで。日晡所發熱有り云々も潮熱小至ら。妄語すも識語小至ら。緩劇の分知るべきあり。○宜作前方加加乃介解。若於字與之以進氣血逐邪。治法頗劇證の治小同くして輕重の別あは乃みなり。

而須病勢頗加發熱漸盛急當與和氣本出雲藥以鎮氣血則愈。

而須病熱頗加發熱漸盛。前治を行て此證を見れば。氣血漸小進みて邪字逐ふ候あり。其時を須ちて後治字あり。

ばきなり。○急當與和氣本出雲藥以鎮氣血則愈。こゝに至てハ全く劇證の治法小異あることあり。

若前證下利者此内外兩感也。當先與男崎藥救其裏。

若前證下利者此内外兩感也。若前の緩證にあて下利す。協も乃ら。邪此爲小裏氣擾動せらきて。其守を失ものなき。ハ。是も亦内外兩感あり。○當先與男崎藥救其裏。劇證と表字攻む故先せは。これハ裏を救ふもて先せは。彼ハ裏を攻む字先せするべきと。表邪因て入て諸變をあらは。此と表を解す協を先せするせは。裏氣益虚憊して遂小救はらげらるに至る。緩劇の分其治を異小すは。こゝ如此。近歲疫





も此ふと大同方の城上藥小加乃余介を加牙て與はし。こ  
ら小青龍湯の行く所なり。又心下痞或嘔吐るものハ日下  
藥によろし。こら半夏瀉心湯の行く所なり。又虻蟲を吐す  
るも此あり。仍日下藥小加乃余介字加牙て與はし。こら理  
中安虻湯の行く所あり。如此諸方を活用して機小應はる  
べきハ。病證の轉變千態万状也云々も。治病の際小眩惑は  
る也。れは依牙し。然ハ何れもこ此皆標證なきバ。其標  
證の急を依小拘みて。其本證伐忽にすはらば。

後清便和調者與出雲藥以解其外

後清便和調者。後ハ前方を與牙て下利止て後あり。清便

ハ。傷寒論下小の語なり。然る。清ハ脈經小四時經を引て。  
清洩痢通注小云々。清者廁也也。あり。劉熙の釋名小。圜至穢  
之處。宜常修治使潔清也。也。何て。即ち廁なり。は。清  
便ハ廁にはある大便を以ふ。和調ハ硬便ほどを得て  
く。此ふたは字以ふなり。○與出雲藥以解其外。此湯  
を與牙て氣血茂順らし。微々小汗を發はる字以ふ。抑此治  
法の必かくあるべきことハ。傷寒論太陽上篇小。傷寒鑿下  
之續得下利清穀不止身疼痛者急當救裏後身疼痛清便自  
調者急當救表裏宜四逆湯救表宜桂枝湯少陰篇小。下利  
腹脹滿身體疼痛者先溫其裏乃攻其表溫裏四逆湯攻表桂

枝湯など有れもて辨ぜし。又活人書小。兩感者表裏俱病也。仲景無治法。但云兩感病俱作治有先後發表攻裏本自不同。尋至第三卷中言傷寒下之云々遂以意尋此做做治兩感有先後宜先救表若陽氣內正即可醫也。內才正急當救表內尤爲緩也。あるハ甚免於らし。して男崎藥ハ亦ハに方を載ざれども。今ハ知易の旨むことを欲て。こゝ小舉て辨牙むせし。そハ

男崎藥 神遺方

方の名義はほゞ詳あらざ。

屠利加之良 小之

波自加民 中之

免木 小之

乎介良 大之

末通保度 大之

屠利加之良ハ附子。免木ハ小檗。乎介良ハ朮あり。其餘ハ既小ハ牙也。方義ハ附子既小モ言牙は如く。氣血を鼓動し奮起せしめて邪を去る。生薑開發はる能残毛て。附子鼓動の力ヲ助多。小檗推ハ能ありて。鼓動の間小氣血を擾亂せし免交。朮ハ推開ク能を兼て氣血を順らし。小便を洩し。扶苓亦朮力戕合を。氣血を順らし。小便を洩し。邪を去なり。一方の主能ハ氣血を鼓動し。結滯を散し。小便を洩し。邪を去るあり。

若疲勞甚兩便遺失者甚危。宜當國玉藥加於宇與之以順。

氣血救裏也。

若疲勞甚兩便遺失者甚危。裏氣益虛して衛護を失はる  
れ。故小危し。こゝ漢小以少陰病を記。○宜當國玉藥加  
於宇與之以順氣血救裏也。國玉藥を以て氣血を順らし。  
附子字加牙て鼓動して裏氣を進え健剛ならしむ。國玉藥  
の方義ハ前小言牙り。

若脈沈弱而小。昏沈如睡。或煩躁而不安。或四肢逆冷者。此  
藏府閉塞。神氣昏耗也。救之最難。當須與伽和之藥。以順裏  
氣。救虛脫。開屈閉。散邪結。以求一生於萬死。

若脈沈弱而小。沈弱ハ脈傳小。沈者皮位之脈不足而骨位

之脈有餘也。此爲氣血退也。弱者如按單布也。此爲氣血衰弱  
也。ゆゑり。小々同書に。小於絃絲也。ゆゑりてほそきなり。此  
衰弱甚き候れり。○昏沈如睡。こゝ神氣正らば昏み沈  
みてウト／＼とて睡るの如くな脈を云牙る小て。神遺  
方小古。路牢斗久以奴流。吳屠紀也。ある證あり。去て神氣  
の大虚なり。○或煩躁而不安。煩躁ハ惟忠曰く。煩但訓熱  
者。未盡其義也。蓋不可情狀。而困悶擾撓。謂之煩也。躁也者。擾  
動展轉。四支とあてて。神遺方小云。母太由雷なり。不安ハ  
不安靜れり。こゝは擾亂甚しく正氣不治あり。○或四肢逆冷  
者。神遺方小云。牙る與通依太非由流なり。こゝ氣内小屈

みて肌表に達せざるが故なり。○此藏府閉塞、神氣昏耗也。  
 上の脈證を見てもみれば、此藏府閉塞して裏氣宣暢せざる能ハ交、神氣昏耗して心智明らばらざる候なり。此最危重此證不<sub>レ</sub>て、漢方ハハ厥陰病なり。○當須與<sub>レ</sub>伽和之藥、以順<sub>レ</sub>裏氣、救<sub>レ</sub>虚脱、開<sub>レ</sub>屈閉、散<sub>レ</sub>邪結、以求<sub>レ</sub>一生、於<sub>レ</sub>萬死。此方多<sub>レ</sub>與牙<sub>レ</sub>て裏氣を鼓動し、虚脱を救ひ云々、とて萬一の生路を求法きあり。して此證一等輕く四肢厥冷せず、亦も此ハ國玉藥の證なり。漢方不<sub>レ</sub>てと升陽散火陽あり、愈重くと此不<sub>レ</sub>至り多らむハ。四逆加入參湯、同陽返本湯れど、の證あり。  
 伽和之久寸但 神遺方

方名のこころ未詳あらば。

依夜民乃免屠治之<sub>三</sub>。之多宇流保比阿里<sub>貞</sub>。與通依太非依底母太依之。古<sub>レ</sub>路宇斗久以祿流吳屠紀蒙乃<sub>亦</sub>阿多布。

エヤテレタウルホロ  
 温疫舌上滋潤ありて、ヨツエダヒヘ手足厥冷、煩躁恍惚閉目<sub>レ</sub>如眠者<sub>小</sub>與ふる方ぞせれ也。こと邪臟腑に集も此小宜き方あり。

加武屠根 小之 免豆良 中之 波自加民 中之  
 多万加波 大之

免豆良ハ芎藭あり。餘々前小ハ牙也。方義ハ附子大力をもて虚脱をむせする氣血を鼓動して奮起せし免邪結也。

散じ。屈閉伐開き内陷を發じ。芍藥生薑桂枝の三味。附子は  
力多助りて開發し易らむ。一方は主能ハ。氣血を鼓  
動し。邪結を散じ。屈閉を開き。内陷を發じ。

本劇證失治因轉屬緩證者亦當同治法也。

本劇證失治因轉屬緩證者亦當同治法也。 此ハ傷寒論。太  
陽上篇小下之後復發汗晝日煩躁不得眠云々。ハ多傷寒證  
下之續得下利清穀不止云々。中篇小發汗吐下後虛煩不得  
眠云々。下篇小太陽病外證未除而數下之遂協熱而利云々。  
ホセ何る如く汗下小因て氣血虛耗し。或全く汗下多失し。  
病仍解をば。邪氣仍在者ハ。大方緩證小轉交るふり。緩證の

治方小隨はきあり。はては多汗下は多して汗下を交む  
て。緩證小轉屬はるもの。亦緩證の治法小從て去せ伐治免  
氣血復す法を俟て再び汗下すはきもの有り。太陽上篇小  
傷寒脈浮自汗出云々。與桂枝湯欲攻其表此誤也得之便厥  
咽中乾煩躁吐逆者作甘竹乾薑湯與之以復其陽云々。胃氣  
不和讖語者少與調胃承氣湯也。あるハ。初免汗下すはく去  
てせざる小ハ非ざむ。先ハ裏を救ひ。氣血復して後小之  
を攻るもみふて。こゝ乃考徴せすはきなり。又後世のもみ  
ふら。名醫類案小郭雍治一人云々。初得疾即便身涼自利  
手足厥額上冷汗不止云々。郭令服四逆湯灸關元及三陰交。

云々證復如太陽云々。大煩躁飲水。次則譫語斑出熱甚。無可奈何。復與調胃承氣湯。得利大汗而解。也。何るをも思合。以牙杞なり。

鑿或別陰陽而療之。吾門隨緩劇以治之。此爲和漢之別也。鑿或別陰陽而療之。他鑿傷寒論小從りて。三陰三陽を法也。陰證陽證を辨別して治療を爲す。以ふ。○吾門隨緩劇以治之。吾門流小ても。陰陽小拘らば。緩劇を診別して其小隨いて治を施す。こき即ち乃里和多良依の篇小。從も其よて。吾古鑿道の準則なり。○此爲和漢之別也。聞えぬ。如し。

治衣夜民之法。大約如此。而至病之轉變。治術之活機。固非短篇所能盡焉。若夫詳說。須俟他日所撰述矣。

治衣夜民之法。大約如此。大約ハ。韻會約字の注小。大率也。也。何りて。オホムネ也。以ハむか如し。○而至病之轉變。治術之活機。轉變とウツリカハルを以ふ。或表證裏證小轉じ。或劇證變じて緩證也。ゆるふなり。活機とハタラキ小て。治術のうすに以ハゆる臨機應變の妙用ある。以ふなり。○固非短篇所能盡焉。固ハ。字彙小。本然の辭也。註以。孟子に。固所願也。也。あり。餘と聞えぬ。如し。○若夫詳說。須俟他日所撰述矣。他日閑何らバ。溫疫要論也。以ふ。書字撰

述きて。證治を詳明せむとす。此ハ其成らむ時を俟ぶるなり。

經驗略疫門口義終

古堂は夏に病あり。五月雨ふり續きける  
ころ。偶多き病免て。醫道乃考せば。窓  
外も堂ふりて。其書等。何と書きて  
繰加ふ。居々。時小。古學に教子ある。東  
京の小傳馬町。住免。市人。吉岡汎愛訪  
ひ來て語けらく。凡人乃世にある間。うき  
事忘げ。記中小。病ふも。の病加。り。字れ。あ  
れ。と。協志。き。ハ。あ。良。け。る。を。其。病。伐。救。ふ。と。



去已志乃方終あり。あれ志九愜しきも終  
無何言交かし。然る小名越。舎の權田法翁  
は毛。此道亦精きのみあらば。靈幸神乃御  
世より傳ハ已來し方不順て。尋常此疾病  
ハ更亦已。世小治免難ゆる。疾病茂さる不  
救ハ賜するハ。比類亦九尊き事不古そ。法  
れ終翁が年來考試みる。書著さき多る書  
等。法はあらむを板不彫りる。世小弘免法

し加終。人々法茂救不端中も亦り終法之。  
又志茂多はき數亦言勞身不は。有法ハ之  
紀勤奈ら亦し中思ひ侍る在。先思終法旨  
茂毛。問ひ侍らはし中。參來終中。以手法  
了。そハ予も月おろ法こそ終茂終る毛終  
在。とく茂思ひ立終る事と亦中。以手終く。  
即ち翁不聞え々れ終。翁も汎愛がは免也  
あ亦る志を免傳賜して。先其む終中ある

書等乃はやく大やりの御許可茂蒙進る  
 を乞ふ。取出て與可賜ひ多り。況愛大之と  
 ろこびく。朝夕多由たふ事ふれ。勤免勞  
 きけ依隨以之ほや毛あ良ざる小。其功子  
 為恩茂。相共小う禮しみけく。其板也も  
 取去りて。名越舍乃塾小かか之納免置事  
 空ハあし侍り恩。明治三之せに秋。大學に  
 東校小仕る奉依源。井上頼因志るは

名越舍大人及門人著述書目

塾藏版

訂 神遺方	三卷	神遺方經驗鈔	十卷
古鑿道治則	一卷	古鑿方經驗略	二卷
古鑿方藥能略	一卷	古鑿方經驗略口義	一卷
古鑿道或問	二卷	大同類聚方再考	二卷
鑿案語彙	一卷	鑿案漢語彙	一卷
鑿一言	一卷	備急方	一卷
くまゝにひこせりひ	二卷	鑿道百首	一卷
古鑿道脈傳	一卷	漢家脈說辨	一卷
傷寒論綱領解	一卷	仲景十二法考	一卷
古鑿道治則略注	一卷	古鑿道治革考	一卷

○ 大同类聚方 <small>武藤直紀刻 今帛藏版</small> 百卷	○ 古史言行頌 萩原直胤 三卷	○ 醫一三言解 齋藤助 一卷	○ 傷寒論采 井上正方著 一卷	○ 神教血縛祕傳鈔 井上正方考訂 一卷	○ 六十四方 井上正方考訂 一卷	○ 大同类聚方 井上賴圀考閱 井上正方傍訓 十卷	○ 醫則 井上賴圀著 一卷	○ 醫道百首解 權田年助 二卷	○ 諸家奇方 權田年助輯 一卷	○ 羅摩子船 井上賴圀著 三卷	○ 避鬼草 井上正方考訂 一卷	○ 上代藥方類書 井上正方考訂 一卷	○ 醫療八衢 井上正方著 一卷	○ 古醫方藥品考 宮西諸助著 十卷	○ 經驗略依夜美治法圖說 八代巨摩雄 一卷	○ 古史言行頌拾遺 萩原直胤 一卷	○ 讀本玉鉉百首本末歌 青柳高鞆刪訂 一卷
--	-----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------------	------------------------	-----------------------------------	---------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	--------------------------	-----------------------	-------------------------	-----------------------------	-------------------------	-----------------------------

